



第18回保育子どもセミナー

「幼稚園がなくなる前に」を振り返って



認定こども園捜真幼稚園園長
寺田 千栄

私は横浜市にある認定こども園捜真幼稚園の園長をしております。寺田千栄と申します。かつてこの六本木校舎で学んだ卒業生です。今回「幼稚園がなくなる前に」という少しドキッとする演題を与えられ、私の幼稚園が今まで培ってきた良い文化を継承しつつ変化してきた取り組みを紹介し、これからの歩みについて一緒に考えたいと思いました。

幼稚園と保育園の文化

長年幼稚園と保育園はそれぞれ明確に違った役割を与えられて歩んできました。しかし社会の子育て機能が弱くなり、家庭の孤立化が顕著になり、そこにコロナ禍と少子化などが拍車をかけ、特にこの10年は今までになく子育て環境は変化してきました。もはや社会や生活の多様化に伴い、幼稚園、保育園という役割ではなくそれぞれの施設が特徴をもち、保護者が自分たちの家庭の状況にあった園を選ぶ時代です。だからこそ、私の園でも保護者にとってどのような機能が必要かを考え、変化してきました。

認定こども園となるまで

当園は所謂2年保育の幼稚園から始まりました。預かり保育を始めた頃は文字通り保育が終わった後の預かりで、ゆったりと過ごせるような家庭的な雰囲気大切にしていました。そのうち、時間も伸び、預かりを利用する子どもたちの人数も増えてきて、保育として捉えなおす必要を感じました。横浜市は市型預かり保育の補助が手厚いので、保育者の人数を増やすことができ、教育標準時間と預かり保育と分けるのではなく、子どもの生活、育ち

をそれぞれに保障していく保育を目指すようになりました。次に取り組んだのが0、1、2歳児保育です。横浜市は特例保育ワースト1になった時、突然市は特例保育というしくみをつくりました。幼稚園での0、1、2歳児預かり保育を始めたのです。補助金をいただいて、一部改装して0、1、2歳児の保育を始めました。この時は年度の途中から始め、宣伝もしていませんでしたが、在園、卒業生の弟妹を含め、せっかく入れた認可保育園を退園して、移ってきた人がいたのに驚きました。保護者は自分で保育を見て、納得して信頼して子どもを預けたのだと思いました。このような経緯を経て、2013年に幼保連携型認定こども園になりました。

幼稚園で大切にできたことを守りながら

子どもたちが園にいる時間が増えるということとは、保育自体の考え方も、保育者の配置も、働き方も変えていかなければなりません。今まで通り「遊びの場所、時間、環境を保障する」「子どもの姿、遊びを語り合う時間を必ず取る」「すべての保育者ですべての子どもをローテーションで見守る」「保育の準備時間を確保する」「PTAが保護者にとって第3の居場所となる」といったことは変えずに、長時間の子どもたちの生活を保障していくにはどうしたらよいかを考え、年間変形労働制と学年担当制を導入しました。学年担当制とは1学年2

クラスを4人で担当するやり方です。クラスの担任をそれぞれ定めずに4人がどちらのクラスにも入り、14時以降の保育にも順番に入ります。こうして皆で子どもたちの1日を連続してみても、連携を取りながら保育することができるようになりました。

2024年度年長組の取り組み

この学年は年少の時から何かを作ることが好きでした。年中の3学期に入った時、同級生の友だちが能登の祖父の家で被災したことを聞きました。年長になってからも制作好きは続き、6月に実施したファミリーデーでは、年長の保育室に滝や川を作りそこに制作した様々な魚を置いて、釣りを楽しみました。ファミリーデーが終わってしばらく楽しさ、いよいよ片づけようとした時、大量の紙ごみになってしまうことに気づき、話し合いの結果この紙をリユースすることになり、また様々な作品が生まれました。9月になって、また能登で豪雨による被害があったことを聞き、能登について調べ始めました。昨年被災したご家庭に写真を提供してもらい、地震と、豪雨の被害についてのスライドを見たり園外保育で能登についての展示を見ました。それから自分たちで何かできないかと話し合い、自分たちの素敵な作品を売って、そのお金を能登に募金しようということになりました。それから長期間に渡って、自分ができることに取り組んでいきました。作品を

作る人、ポスターを作る人、お店のスケ
ジュールと担当を決める人、販売員、宣
伝、そして12月に「捜真能登スパー」を
開催し、3万円以上を売り上げ、能登の珠
洲市に現金書留で送ることができました。

この長期にわたる取り組みは遊ぶ時間が
たっぷりあること、その中で子どもも大人
も自由に意見を言っていて、相談できること、
どの時間も取り組めるために保育者間で連
携が取れていることに支えられてきまし
た。

形は変わっても、私たちが大事にしてき
たことを守り続けることはできます。それ
ぞれの園での強みを生かし、共に歩んでい
きましょう。

心ゆくまで共に楽しんで

認定こども園捜真幼稚園 勝村 日向子

英和を卒業し、この園に務めて10年目を
迎えました。今担当している年少組では、
絵の具を楽しんでいます。赤・青・黄・白
の4色で色水を作るのですが、思い通りの
色が出るまで「もう1回」と繰り返し挑
戦し、出来上がった色の美しさに目を輝か
せて「ママに見せよう」と大切に持ち帰る
姿があります。段々と親しみを覚え、障子
紙を染めてみたり、手や指で塗り広げたり
することも楽しむようになったので、先日
ボディペインティングをしました。体が汚
れることに戸惑う人もいましたが、筆で紙

いっぱいに描き始め、次第に自分の腕や手
の平にも塗り始めました。心も体も解放さ
れどんだんだんに楽しむ子どもと共に互い
の体に絵の具を塗り合い、「くすぐったい
ね」「冷たいね」と話しながら感触を味わ
いました。

保育の中で子どもたちの言葉や表情、ま
なざしを通して思いに触れる度、豊かな感
性や気づきに感心します。子どもの目線で
世界を覗いてみると、私自身も改めてその
魅力を知ることができると実感していま
す。これからも、粘り強く試行錯誤をし、
自分のペースで心ゆくまで取り組む時間と
環境を大切にしながら共に思いを分かち合
える保育者でありたいと思います。



子どもの声から広がる保育

認定こども園捜真幼稚園 阿部 桃子

英和での四年間は、授業での知識の積み
重ねに加え、実習を通して子どもの姿を丁
寧に見取り、その意味を考える大切さを学
んだ時間でした。その経験は、今の保育に

生きていけると感じる機会が多くあります。

昨年度、担任していた年長児と夏みかん
をバケツ二杯分収穫した際には、「ただ食
べるだけでなく何か作りたい」という声か
子どもから上がり、まずは何を作るかの話
し合い。「夏みかんジャム」「夏みかんゼ
リー」など沢山の意見が出て、最終的に夏
みかんゼリーを作ることに決まりました。
準備では仕切つて話を進める人、意見を紙
に書き出す人、文字が苦手な人を助ける人
と自然に役割が生まれ、買い物や調理も順
番にしていきました。完成したゼリーを学
年全員で食べた達成感はもちろんですが、
それ以上に、話し合いや準備、調理の過程
で一人ひとりの強みが発揮され、互いに支
え合う姿が見られたことが大きな喜びでし
た。

「子どもの声から保育を広げていくこと」
や「過程そのものを大切にすること」は、
学生時代の学びからつながっている実感が
あります。これからは子どもの思いや発想
を出発点に、共に作り上げていく保育を積
み重ねていきたいと思っています。



園内工事における

乳児クラスの反応と交わり

認定こども園捜真幼稚園 久米 絢子

私は英和を卒業後、今の園に勤め、結婚
を機に退職しました。出産後に子どもと共
に園に戻り、現在は非常勤で働きながら、
同園に我が子が通う保護者でもあります。

今年の夏も酷暑が続き、また園舎の建替
え工事もあり、これまで以上に制限のある
夏を過ごしました。そんな中でも子ども
たちは神さまに守られながら、各々が自分
を發揮して、今を楽しんでいます。1歳
児は工事車両の後退音が聞こえてくると
「ピーピーきたね！」と嬉しそうに伝えて
くれます。表情や身振り、言葉等今持ち合
わせている手段で懸命に伝えようとする姿
から、子どもの内側から溢れ出てくる強い
エネルギーを感じます。2歳児の子どもた
ちは、毎日門の前で安全管理を下さる
工事の方に親しみを抱き、挨拶やハグをす
る姿もありました。園内工事を間近で見
ることを通して、子どもたちが工事車両や工
事現場の方々を身近に感じ、良い交わりの
時となっていました。

子どもたちの日常の中にある出会いや気
づき、心が動く瞬間など、様々な成長の場
面に立ち会い、近くで感情を共有すること
は、保育者の重要な役割であると同時に、
大きな喜びとやりがいを感じています。

問い続ける中、保育を通して 教えられている「敬神奉仕」

東洋英和女学院大学付属
かえて幼稚園 田中 百合

私は東洋英和女学院大学に入学して、初めてキリスト教と出会いました。また、建学の精神である「敬神奉仕」という言葉にも出会いましたが、在学中にはその理念を深く理解するところまでには至っていませんでした。幼稚園に就職してからも「敬神奉仕」とは？を、自らに問い続ける日々でした。大学を卒業後、私は教会付属の幼稚園に就職し、その後神さまに導かれ現在に至るまで大学付属かえて幼稚園で、子どもと共に生活する恵みに与らせて頂いています。その保育の日々に御言葉に立つての「敬神奉仕」の意味が少しずつ理解できるようになっています。

大学の畑でジャガイモを掘ってその場で焼いて、いただきました。年間を通して園では味噌汁を何回も作り、園庭の梅で梅干しを作っておにぎりパーティーもしました。その他、園庭で実ったブドウやキウイやキカンを食べる等、神さまからの恵みたくさん頂きました。

3月、卒業を控えた子どもたちに、「今まで一緒に過ごしてきた小さい組の方たちに、楽しかったね、またね、という気持ちを表すために何かできないかしら？」と相談をしました。すると、食べることに、作ることに大好きな子どもたちは、「クッキーを焼いてお店屋さんを開いて招待しよう」と決めました。何をどのように準備しようか？と相談している中で、「部屋をかわいく飾ろう」「机と椅子も準備しよう」と様々なアイデアが出ました。その時、Aちゃんから「クッキーを作る時は、愛をこめて」という言葉が出てきました。すると、それに応えるようにBちゃんが「愛はかくし味」と言いました。子どもたちは、クッキー生地を丸めながら「愛を……こめて……」とつぶやいていま



ました。

お店屋さん当日、クッキーを食べに来た4歳児の子どもが「クッキーの中には何が入っているの？」とCちゃんに聞きました。私はフレック入りのクッキーについて、どのように答えるかしら？と傍で聞いていました。するとCちゃんが嬉しそうに「心だよ」と伝えていました。この活動は、初めから終わりまでとても和やかに楽しい時間でした。

上記のエピソードは愛にあふれています。が、実際の園生活の中では子ども同士喧嘩もたくさんしましたし、友だちの気持ちを思いやれない時もありました。泣いたり怒ったり、自分中心になってしまうこともありました。そのような関わりを経た子どもたちに、卒業間近になってこのような姿があったことを嬉しく思いました。そして「愛」という目には見えないものを実感している子どもたちを思わされた時でもありました。

かえて幼稚園では週に1度子どもたちと共に聖書の話や聴く礼拝の時間を守ります。神さま・イエスさまの愛を保育者が語りを通して、子どもたちと共に神さま・イエスさまに愛されている者であることを受けとめていきました。ある日の礼拝を終えた時、「先生、私ね、愛されているってどういうことかわかるよ」とDちゃんが私のところに来ました。「それは、どういこう

と？」と聞いてみると「あのね、お母さんにぎゅーって抱きしめられているような、そういう気持ち」と返ってきました。私は心から感謝しながら「そうね、神さまもイエスさまも、Dちゃんのことをそのように抱きしめてくださっているのよね」と答えました。

私は、子どもたちが礼拝の時間の中だけではなく、自分の遊びを深める時、仲間と一緒に遊ぶ時、皆と集って活動をする時等、園でのあらゆる生活の中で、「神さま・イエスさまから愛されていること」を感じていられますようにと願っています。その信頼があるからこそ安心して歩むことができ、また隣人を自分のように愛することができます。そしてそのことが、この先の子どもたちの人生においての大きな土台となっていくことでしょう。この幼子との豊かな生活の道筋を、東洋英和女学院大学に入学し、保育者養成課程で勉強したことによって得ることができました。これからも東洋英和女学院大学で学んだことを胸に、私自身が、イエスさまに助けて頂き、神さまを敬い、幼子を愛するという保育を、「敬神奉仕」を心に留め、その意味を問いながら喜んで重ねていきたいと思えます。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。隣人を自分のように愛しなさい」マルコによる福音書12章30節31節より

2026年度学科名称の変更に伴う保育者養成の方向性

保育子ども学科主任 山本 真実

現在の保育子ども学科は、2010年度より人間福祉学科での保育士養成課程と人間科学科内で行われていた幼稚園教諭1種免許課程を統合して、東洋英和女学院の保育者養成の伝統を引き継いで今日に至ります。保育子ども学科では、人間福祉学科時代に行っていた社会福祉の専門教育の成果を活かし、障害児や児童養護等、支援を必要とする子どもたちの育ちを保障するケア実践を大切にするとともに、キリスト教保育を通して、子どもたちの主体的な学びを通して敬神奉仕の理念を掲げる保育の中にも具現化できる保育者を多数輩出しています。

2026年度より1学部3学科体制のもと「子ども教育学科」と学科名称を変更しますが、保育子ども学科として紡いできた東洋英和の保育の神髄は守りつつ、子どもの育ちの過程の中で大切な「乳幼児期」にフォーカスした学びを提供する学科として引き続き保育者養成の使命を全うします。「乳幼児期」は人生の根っこであり、始まりです。この時期の教育とは小学校での就学を目的とした学校教育を意味するのではなく、子どもの心や精神の豊かさを育てる学び、体験、関わりによって構成されるものであると捉えています。子どもが育つた

めに本来に必要な環境整備を見据えながら、現代社会の子どもと家庭が抱える課題解決を支えていくことができる保育者を養成していく学科としてカリキュラムを再構築しました。

これまでの東洋英和の保育者養成の核としての「保育子どもコース」は、子どもの主体的な育ちを支援するキリスト教保育をベースに保育者養成を行います。「子ども国際コース」は、日本で暮らす海外にルーツを持つ子どもたちや家庭に関わったり、海外で保育者として働くことを希望する保育者養成を見据えています。「子どもアートコース」では、子ども期に育んでおきたい感性や豊かな人間性を育てることに専門性を持つ保育者を養成するコースです。これまででは3年次になるときにコースを緩やかに選択するという形でしたが、新学科では2年次からコースを考えていくつかの専門科目を履修することができるようになることから、3年間かけて自分の専門性を確認し決めることができます。

また、人間社会学部という1学部のもとでの学科となったことで、総合心理学科と国際学科の授業もより多く履修できることや、領域横断プログラムによって、自分の学科内の学びがどのように広がっていくのかを知ることができるため、保育者養成課程に留まらない広い視野で物事を考える機会を得ることができると期待しています。

第19回 保育子どもセミナー

日時：2026年1月24日〔土〕13時00分～16時00分（受付：12時30分～）

場所：東洋英和女学院大学大学院 201教室（東京都港区六本木5-14-40）

トークイベント：「絵本ができるまで—えほんさっかのゆくところ—」

講師：加藤 晶子氏（絵本作家・東洋英和女学院大学2002年卒業）

パネルディスカッション：関谷 弘毅（人間科学部 人間科学科 准教授）

マグダレナ・コウオジェイ（国際社会学部 国際コミュニケーション学科 准教授）

塩崎 美穂（人間科学部 保育子ども学科 教授）

12:30	13:00	13:15	13:55	15:00	16:00
受付	開会挨拶 祈祷 企画説明 山本真実 (保育子ども 研究所)	トークイベント 「絵本ができるまで —えほんさっかのゆくところ—」 加藤 晶子氏 (絵本作家・ 東洋英和女学院大学2002年卒業) 司会：廣部朋美 (保育子ども研究所)	パネルディスカッション 関谷 弘毅 (人間科学部 人間科学科 准教授) マグダレナ・コウオジェイ (国際社会学部 国際コミュニケーション学科 准教授) 塩崎 美穂 (人間科学部 保育子ども学科 教授)	質疑応答 & 全体討論	

対象：大学生、大学院生、保育者、保育関係者、その他関心のある方

定員：約100名（対面開催）

申込み：https://forms.gle/CHjNVppoe3DcToi7

問い合わせ：educare@toyoeiwa.ac.jp

（お申込みフォーム）



子どもセンター Newsletter 第22号

発行日：2025年11月 発行：東洋英和女学院大学保育子ども研究所

〒226-0015 横浜市緑区三保町32

☎：045-922-7718

ホームページ：https://www.toyoeiwa.ac.jp/

セミナー情報等、メールでお知らせを希望する方は、educare@toyoeiwa.ac.jp までお知らせ下さい。